

平成20年度 評価結果報告書
【水産試験場、栽培漁業センター、内水面総合センター】

- 1 機関名
農林水産業活性化支援研究評価会議
水産研究評価会議
(水産試験場、栽培漁業センター、内水面総合センター)
- 2 開催日時
研究課題評価 平成20年8月19日(10:00~17:00、プラザ萬象 多目的ホール)
- 3 出席者
〔委員〕
廣石 伸互 (福井県立大学生物資源学部 教授)
白石 學 (独立行政法人水産総合研究センター 日本海区水産研究所 所長)
森川 良子 (水産政策審議会委員)
高橋 治 (福井県漁業協同組合連合会 会長)
山本 忠 (福井県海水養魚協会 会長)
安達 辰典 (福井県農林水産部水産課長：内部委員)

〔オブザーバー〕
杉本 剛士 (水産課参事)
木下 仁徳 (水産課主任)
鈴木 聖子 (水産課主任)

〔実施主体〕
若林 健一 (水産試験場長)
鈴木 康仁 (水産試験場海洋・浅海部長)
村本 昭市 (栽培漁業センター所長)
石原 孝 (内水面総合センター所長)
岡部 健一 (栽培漁業センター主任研究員)
松崎 雅之 (内水面総合センター主任研究員)
成田 秀彦 (食品加工研究所主任研究員)

〔説明者〕
(研究課題評価)
山田 洋雄 (栽培漁業センター主任研究員)
清水 弘明 (内水面総合センター主任研究員)
松崎 賢 (内水面総合センター主任研究員)
川代 雅和 (水産試験場主任研究員)
吉村 祐一 (水産試験場主任研究員)
畑中 宏之 (水産試験場主任研究員)
前田 英章 (水産試験場研究員)

〔事務局〕
岩谷 芳自 (水産試験場主任研究員)
吉村 祐一 (水産試験場主任研究員)
仲野 大地 (水産試験場主事)
- 4 評価範囲
(1) 研究課題評価
〔事前評価課題名〕
○ サワラの回遊・生態調査(仮称)(水産試験場)
○ 県産水産物の鮮度管理・保持技術の開発(水産試験場)

[中間評価課題名]

- バフンウニの資源回復対策の研究（水産試験場）

[事後評価課題名]

- 外来魚分布状況と生態調査（内水面総合センター）
- 県内河川に遡上する海産アユ資源量調査（内水面総合センター）
- 安全でおいしい若狭ふぐ高品質化事業（水産試験場）
- 魚類の優良遺伝子および遺伝的多様度に関する研究（栽培漁業センター）

[追跡評価課題名]

該当なし

5 総評概要

(1) 研究課題評価

事前評価 2 課題については、全て A 評価であった。

中間評価 1 課題については、B 評価であった。

事後評価 4 課題については、80 点以上が 3 課題、80 点未満が 1 課題であった。

評価結果

(1) 研究課題評価

①事前評価

研究課題名	研究期間	研究目的および必要性	総合評価	主な意見
サワラ回遊・生態調査(仮称)	H21 ~23	急増したサワラ資源を持続的に利用していくために、未知の日本海におけるサワラの生態、資源構造(年齢構成、成長、成熟。回遊等)および東シナ海からの来遊条件を明らかにする。	A (91.3)	<ul style="list-style-type: none"> 日本海のサワラ資源増加要因を解明することは、産業的、学術的にも重要である。 サワラの利用加工振興が図られ、漁況予測にも活用される研究である。 サワラ資源増加による他の有用魚種への影響も検討すべきである。 研究項目には、日本海におけるサワラ資源変動予想や初期減耗の検討が必要である。 研究は漁業者、消費者にとっても有益で、波及効果も望める内容である。
県産水産物の鮮度管理・保持技術の開発	H20 ~22	急増したサワラの利用向上を図るために、サワラの適切な品質管理方法および品質に応じた利用方法の検討を行い、サワラ活用の普及を推進する。	A (90.0)	<ul style="list-style-type: none"> サワラの経済効果を高める重要な研究である。 研究方法、計画および行政との一体化も計画しており、妥当な研究である。 他の食品への応用、PR手段等、それらの専門分野の人達と話し合いながら研究を進める必要がある。 PRによる消費拡大、魚価向上に期待する。 鮮度保持技術の開発により、サワラの地産地消が推進される研究である。 研究を推進する上で民間企業との連携が必要である。 サワラの回遊・生態調査と連携をとりながら、研究を進めるべきである。

②中間評価

研究課題名	研究期間	研究目的および研究成果	総合評価	主な意見
バフンウニの資源回復対策の研究	H17 ~21	バフンウニの資源回復を図るために、資源減少要因を調査し、資源回復対策を構築する。	A (85.2)	<ul style="list-style-type: none"> 水温耐性ウニの作出は、地球温暖化にも関連し、重要な研究と考える。 現状での資源改善策を模索しているのは評価できる。 生残率向上の技術開発と資源回復に向けた大量生産放流に期待する。 各種資源回復手法について、実行性の可能性について整理、検討すべきである。 種苗生産コストの提示、夏期の生残率向上の方策の構築が急務である。 計画通りに研究成果が得られている。

③事後評価

研究課題名	研究期間	研究目的 および研究成果	総合 評価	主な意見
外来魚の分布状況と生態調査	H16 ～19	在来魚の生態系に影響を与え、漁業被害も懸念されている外来魚（ブルーギル、ブラックバス）の効率的駆除方法を確立するために、本種の基礎的知見および産卵特性に関する知見を得るために調査を実施した。	80.2	<ul style="list-style-type: none"> ・ブルーギル対策については、事業成果は出ている。 ・今後、駆除に対する県民活動の拡大や三枚網導入について検討する必要がある。 ・外来魚駆除方法をまとめ、広く指導する必要がある。 ・人工産卵礁活用の普及振興が必要である。
県内河川に遡上する海産アユ資源量調査	H14 ～19	アユ資源の増大を図るために、海産アユ資源量の把握、資源の有効かつ継続的な利用をするために、沿岸域の稚アユ分布調査および生息環境調査等を行った。	78.7	<ul style="list-style-type: none"> ・海洋での仔魚分布は、人工構造物、汽水範囲に影響され、環境への提言が行える研究となる。 ・アユが遡上する良環境の創生に繋がる研究である。 ・漁獲量と河川水量との因果関係について検討が必要である。 ・健全な漁協経営も含め、適正放流量を示すためにも、研究内容の絞り込みが必要である。
安全で美味しい若狭ふぐ高品質化事業	H16 ～19	安全で美味しい養殖トラフグ生産を推進するための養殖技術を開発した。	82.3	<ul style="list-style-type: none"> ・食の安全性を推進する研究であり、今後、広報・普及を図り、ブランド化に努めるべきである。 ・品質が養殖魚と天然魚に差はないとする成果は大きい。 ・梅肉効果の知見は注目される。今後、鰓虫寄生数の必要な減少数を明らかにする必要がある。 ・今後、水産用医薬品使用量の減少や肉質改善に期待する。 ・具体的な梅肉添加方法、給餌期間について詰める必要がある。 ・肉質評価項目を客観的にする必要がある。
魚類の優良遺伝子および遺伝的多様度に関する研究	H15 ～19	本県の水産重要種であるヒラメの栽培漁業の効率化を目指し、放流種苗として優れた特性を持ち、かつ遺伝的多様性の高い種苗の作出技術を開発する。	86.5	<ul style="list-style-type: none"> ・今後の成果活用に期待する。 ・選抜した特性を発現させる遺伝子を特定することが今後の課題であるが、将来性がある研究である。 ・今後、優良な養殖用種苗の選抜方法についての研究を要望する。 ・解析ソフトの知的所有権を明確にする必要がある。 ・選抜した優良種苗での放流追跡調査が必要である。